

臨床心理学の最新知見

「セカンドステップ：暴力防止教育プログラム」の紹介と
「情緒障がい児短期治療施設バウムハウスにおける
セカンドステップ」の模索

溝端紫津子

2008年5月

Ψ金剛出版

連載

臨床心理学の最新知見 第44回

「セカンドステップ：暴力防止教育プログラム」 の紹介と「情緒障がい児短期治療施設バウムハウス におけるセカンドステップ」の模索

溝端 紫津子 (情緒障がい児短期治療施設バウムハウス・育ちの支援課)

I はじめに

2007年4月～12月、筆者が勤務する情緒障がい児短期治療施設バウムハウスにおいて、入所児童の「対人関係スキルの向上」を目的とし、セカンドステップ（暴力防止教育プログラム）を試行した。以下にセカンドステップの概要とバウムハウスでの取り組みを紹介する。

II セカンドステップの概要

セカンドステップは、米国ワシントン州にあるNPO法人Committee for Childrenで開発され、全米百数十の暴力防止教育プログラムの中で「最も効果的なプログラム」として米国教育省から表彰を受ける（2001年）など、米国では高く評価されている。プログラムは、子どもの社会的能力を発達させ、子どもの社会的・情緒的問題を減少させ、深刻な問題行動の発生を未然に防止することを目的としている。プログラムの内容は、健全な社会的・情緒的発達を促すための基本的なスキル（怒りや衝動のコントロール）を子どもに教えるもので、米国・カナダではすでに2万校以上の幼稚園、小学校、中学校において採用され、約1,200万人がレッスンを受けている。北米以外で

は、欧州などの各国で約4,000校、約180万人の生徒が対象となっている。

日本では、NPO日本こどものための委員会（Committee for Children Japan, 以下CFCJ）が、このプログラムの教材（日本版）の出版、研修会および調査研究などを包括的にすすめている。「セカンドステップ」を、地区や学校、関連機関、あるいは個人的な単位で導入する場合、CFCJが開催する研修会に参加し、プログラムの基本的理論と実践を学習し、「研修生」となる必要がある。その後、研修生は、研修実践を積み、一定期間後「指導員資格審査」を受けることができ、合格者は「指導員」として認定を受ける。CFCJは2008年2月までに35回の研修会を開催し、1,000名の研修生（プログラム実践認可者）を輩出しており、昨年は、東京都品川区で、全国で初めて教育委員会によるセカンドステップ導入が全公立小学校を対象に開始されている。

また全国各地の児童養護施設、児童相談所からも問い合わせや研修会への参加があり、今後さらなる広がりが予想されている。

1. プログラムの構成

セカンドステップ・プログラムは「大人の場合でも、共感、自己表現、問題解決、怒りの扱いの

社会的スキルが欠如していると、「反社会的行動につながる」という研究 (Feshbach & Feshbach, 1969 など) から、「相互の理解」「問題の解決」「怒りの扱い」の3つに着目し、1) 子どもがそれらのスキルを適切に使えるようになること、2) そのことによって社会への適応力を高められること、の2つを目標として作られている。また、子どもが健全に育つことや、子ども自身で問題を解決することができるよう支援することも目的のひとつである。なぜなら、子どもが自ら周囲に対して適切に働きかけることができるようになると、自尊心を高めることにつながり、教科を学習する準備ができ、将来の各種不適応症状の防止になると考えるからである。

合計 28 回のレッスンから成る“コース①”のプログラムは、以下のような3つの章で構成されている。

第1章「相互の理解 (Halberstadt, Denham & Dunsmore, 2001)」では、子ども達の共感・自己表現能力を高められるような工夫がなされている (12 レッスン)。この章で子ども達は、1) 他者の気持ちを感じとること、2) 他者の立場に立つこと、3) 他者に対して、思いやりの態度を示すこと、4) 自分の気持ちを表現すること、の4つを学び、それらの行動が実際にできるようになることを目標としている。

第2章「衝動コントロールと問題の解決 (Crick & Dodge, 1994)」では、子ども達は衝動的・攻撃的言動をやわらげるために必要な問題解決スキルを学び、実際に日常の対人関係に応用していくことを励まされ、ロールプレイを通じて社会的言動の練習経験を積んでいくことに重点が置かれている (10 レッスン)。

第3章「怒りの扱い (Eisenberg, Fabes & Losoya, 1997)」では、怒りの言動をやわらげるため「怒りの感情を自覚すること」と「自覚した怒りをやわらげる方法」を学び、怒りを上手に表現する練習を行う (6 レッスン)。

各章は、認知-行動理論に基づいており

(Kendall, 1993, 2000)、方法論は社会的学習理論 (Bandura, 1986) と社会的情報処理モデル (Crick & Dodge, 1994) から発展している。すなわち、感情・思考・行動は、相互に影響を及ぼし合っているため、思考と行動の関係性を使うことができるという一連の研究がセカンドステップの理論的根拠となっており、「共感性」や「怒りへの対処法」は学習によって学ぶことができる、という立場でプログラムは作られている。

2. レッスンと教材について

レッスンは、1週間に1回程度のペースで約 20～30 分間行う。毎回のレッスンの流れは、「導入」→「お話とディスカッション」→「ロールプレイ」→「日常への展開」となっている。

「導入」ではゲーム・歌・人形劇などを行い、レッスンに入りやすい雰囲気作りをする。「お話とディスカッション」では、教材のレッスンカード (以下、Lカード) の場面設定に従い、登場人物の気持ちや何が問題なのかを理解するために、意見を出し合って考える。どのような意見も批判されず、受け入れられ、多様な解決策が考え出される (ブレンストーミング)。その後、レッスンで学習したスキルを場面設定に合わせて実際に演じてみせる。子ども達もひとりずつスキルを使う練習をする (ロールプレイ)。そして、レッスンで学んだスキルが日常生活の中で使えるよう適切な支援や働きかけを行っていくことがレッスンの効果を高める鍵となる。

米国のセカンドステップは、未就学児童向け以外に小学生各学年向け・中学生向け、およびその保護者向けのプログラムがあるが、日本のセカンドステップは、学年別ではなく、年齢別のコースに分類する方向で改訂が進められている。

2008年2月現在、国内で販売されている教材は、「4～8歳用 (以下“コース①”)」と「小学高学年用 (以下“コース④”)」の2種類で、それぞれの年齢に期待される社会性を身につける学習内容となっている。これまで最も普及してきている“コース①”の教材には、28枚のLカード



図1 「ふたりは、どこが同じで、どこが違う？」(第1章「相互の理解」お互いに理解し合い、思いやりのある関係を作る)

(図1 & 2), 歌のCD, ぬいぐるみパペットなどが含まれていて, 就学前の子どもでも楽しくレッスンをすすめられるよう工夫がなされている。「コース④」では, ビデオを使うレッスンがあり, 題材となる18枚のLカードは, より年齢の高い子ども達が出会う問題を想定したストーリー展開となっている。

Ⅲ 「情短施設バウムハウスにおけるセカンドステップ」の模索

バウムハウスでは, 入所児童に対し, 児童精神科医のもと6名の心理療法士が緊急性が高いとアセスメントされた児童から順に個別心理療育支援を行っているが, まだ全児童に均等な機会を割り振れるには至っていない。療育支援施設である以上, 全児童に心理療育的なアプローチを行き渡らせる必要性からグループ療法導入が検討され, セカンドステップが試行されることになった。バウムハウスは, 環境療法的な生活中心の治療アプローチを目指しており, 子ども達の生活を安定させるためにグループ別の支援(生活場面で行動を共にするグループ制)を採用している。それらの生活グループ単位でセカンドステップを実施することで, 子ども達の共感性や社会性を向上させ, 攻撃的な言動を減らし, 生活を安定させることができなかつたかと考えた。したがって, 対象グループは,

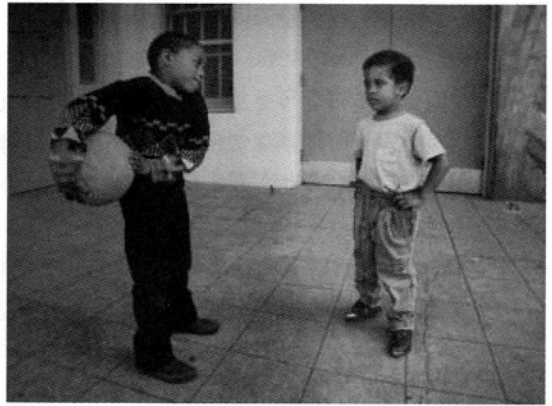


図2 ボールを横取りされた時, 怒りの気持ちを落ち着かせるには? (第3章「怒りの扱い」怒りの感情を自覚し, 自分でコントロールする力を養う)

生活を共にしている男子棟・女子棟のグループから各1, を対象とした。これらは, それぞれ問題背景を異にする子ども達の混合グループである。

1. <4~7月: 試行錯誤期>

各グループの構成メンバーは, 女子(6-7名・小4~小6)・男子(7-8名・小2~小6)で, 開始当初は, 週2回(1回30分)のレッスンを下校後に行った。

レッスンを行った集団遊戯室は, 普段出入りが禁じられている場所であるため珍しさがあつた, 当初, 子ども達の探索行動が激しく, 乱暴に遊戯室を出入りし, 物を投げ, 大声で騒ぐ子どもがいたり, 安全ロックされている窓をこじ開けようとしたり, 電話や電気のスイッチを破壊しようとしたり, ケンカが始まったりの対応に追われてしまい, レッスンが全くできないこともあつた。1学期の間は, 他の職員(複数)に毎回応援を頼み, 可能な限りマンツーマンの対応ができるよう努力した。レッスンの前後には, 職員間でミーティングを重ね, 「レッスン以前に, 子ども達が安心してくつろげる空間を作る」ことを当面の目標とし, 実施場所を和室に変更するなどの試みを行った。

男子グループは初めのうちは, セカンドステップの歌を大きな声で歌い, ロールプレイを楽しむなど, 順調に見えたのだが, 次第に時間になつてもメンバーが集まらなくなり, 夏休み前に事実上

崩壊してしまった。その要因としては、外遊びが楽しい時期と重なっていたこと、小2～小6までと子どもの年齢に幅があったこと、新規の入所・児童相談所への一時保護などによるメンバーの入れ替えが度々あったことが考えられる。

一方の女子グループは、最初から集まりが悪く、「ださい。うざい。ぽっかじゃないの」とレッスンに不快感を示し、時間に遅れてやってきては、暴言・妨害行動ばかりで継続が懸念されたが、夏休み前に「お楽しみ会」を企画、それに向かってレッスンを頑張る、という目標設定が子ども達のレッスン参加への動機づけとなり、2学期につながることができた。

2. <9～12月：定着期>

夏休み明けからは、30分という短い時間で全員の動きを捉え適切な対応を取るのには困難という反省から、女子グループを2つに分け（4名と3名）、週1回（30分）の実施とし、ひとりひとりの話をじっくり聞けるよう改めた。また、1学期は、レッスンへのスムーズな導入のあり方を求めて、ゲーム・人形劇・粘土・おりがみ・切り絵・視覚に訴える掲示物作り（あいさつ・ルール確認・スキル）・CDを使って歌を歌うなどさまざまな試みを行ったが、2学期は、それまでの試行錯誤を改め、子ども達が落ち着いて過ごせるように、できる限り毎回、同じ部屋で、同じレッスンの流れを作ることを心がけた。

3. 新たに工夫したこと

マニュアルにあるU字型に椅子を並べるのはやめ（このスタイルでは子ども達は着席しない）、大きな机を囲むスタイルをとった。机の上に模造紙と“ぬりえ”，色えんぴつとサインペンを用意したら、ばらばらにやってきては無秩序に動き回っていた子ども達が、着席し、落書きをしながら職員とおしゃべりを楽しむ姿が見られるようになっていった。そして、初めはソーシャルスキル・トレーニング（SST）を意識して始めたセカンドステップだったが、受容的なグループセラピーを意識したものになるにつれ、いつの間にか子ども

達がセカンドステップの時間に自然に集まってくるようになった。種々の絵本を用意し、時間が許す時には本読みもした。情緒の変動が激しい子どもばかりなので、レッスンにのれない日もあったが、他児の様子を見ているだけであっても、とりあえずやってきて時間がくるまで落ち着いて部屋の中で過ごす、というように変化していった。

30分（1レッスン時間）のうち、子ども達の集中できる時間を考慮して、Lカードを使って話し合う時間は10分程度にとどめ、メリハリをつけるよう心がけた。女子グループのメンバーは思春期にさしかかった小学高学年が中心で、1学期に施行した“コース①”は「幼稚っぽい」という批判が出ていたため、2学期以降は、“コース④”を取り入れた。彼女らは新たに導入したビデオ教材に強い関心を示し、繰り返しビデオを見たがった。そして、2学期の最後には、お茶とお菓子を囲んでクリスマスの小物を作るささやかなお楽しみ会を企画、手作りの修了証を渡し、なごやかな雰囲気の中で初年度のセカンドステップ・グループを終了した。

4. 反省と留意点

情短施設バウムハウスで、セカンドステップをマニュアル通りに進行させることは予想した以上に困難であった。安定した対人関係の経験が乏しい子ども達から、プログラムが提案するスキルの習得意欲を引き出すことは大変難しいと実感した。しかしながら、子どもの発達理論を基礎に構成されているセカンドステップを丁寧にすすめていくことは、子ども達が発達の過程で取りこぼしてきたものを明らかにし、補い、必要な修正を促す一助になると思われる。

それから、完成されたプログラムというものは、洋服にたとえれば“型”のようなものなので、土台として必要なものではあるが、実践に際しては、マニュアル通りにすすめることにこだわらず、子どもの目線になって、レッスンを受ける子どもの文化に即した内容となっているか確かめながらすすめるほうが、よりプログラムを生かすことにな

るのではないだろうか。

例えば、シカードはアメリカ版がそのまま使用されているが、“日本の子どもをモデルにしたもの”が（副教材としてでも）あると、子ども達はプログラムをより身近に感じることができると思う。実際にレッスンの中で子ども達は「なんで外人なの？」と写真に強い違和感を示すことがあった。また、北海道に住んでいる子どもにとって移動手段として馴染みのない“電車”が話し合いの素材に出た時には、通常の移動手段である“車”に変えたほうが“共感”を得やすい、など地域に即した変更も必要であろう。落ち着いて考えたり行動することが苦手な子ども達を対象にレッスンを行う場合には、できるだけ絵や文字を使ってキーワードを示すなど視覚に訴える工夫をしたり、レッスンの長さ・場所・ルールなども吟味して設定していかなければならない。中でも、グループのメンバリングは大変重要である。生活場面での人間関係がそのままグループに持ち込まれるので、攻撃の対象になりやすい子や周囲を威圧するタイプの子がメンバーに含まれる時には特に、十分な配慮が必要である。

施設の生活では、日誌など日々の記録から子ども達が現在直面している問題を具体的に拾うことが可能である。それらを上手にお話や劇に仕立て上げ、レッスンに盛り込んでいくことができると、レッスンと日常生活に確かなつながりが生まれる。レッスンで学習する共感や自己表現のスキルは、暴力防止やさまざまな SST の基礎となるものである。共感的態度が身に付くと、子ども同士の結びつきが深くなり、子ども同士で話し合う機会が増え、その結果、よくある子ども同士のトラブルが減少する効果が期待できる。セカンドステップを定期的実施して生活の中に自然な形でプログラムを溶け込ませていくことができれば、日々の暮らしに平安と安定をもたらす効果を期待することもできよう。

IV まとめ

セカンドステップは、通常の学級や集団に対して指導するように作られたもので、特別な支援が必要な子ども達を対象としているわけではない。教師の他、スクールカウンセラーや、セラピストなどが個人やグループを対象として使用することも可能である。多くのスキルは、臨床の場で考案され施行されてきたもので、応用範囲も広く、工夫のしがいがあるものである。

バウムハウスのような施設でセカンドステップを実施する場合、ファシリテーターは、毎回のレッスンを充実させることに加え、グループのメンバー一人ひとりが抱えている問題とその背景に対する理解を深め、関係構築に努めることに加え、子ども達が“今”日常生活で直面している問題（子ども同士の人間関係を含めた）を了解していることが求められる。試行した“模造紙法（自由な落書き）”では、子ども達は個々人の抱えている問題を表現してくるので、セラピストがファシリテーターとしてかかわる場合にはそれらに対応していくことが欠かせない。また、施設内外の関係者とスムーズに連携が取れるよう常日頃心がけておく必要がある。さらに、支援チームの一員として積極的な情報収集を行い、レッスンの様子を担当職員にしっかりと伝えていくことも重要な責務である。セカンドステップのスキルは生活の中で使われて初めて効果を期待することができる。単なる絵空事ではなく、子ども達が“スキルを実際に日常生活の場面で使ってみよう”と思える環境を作っていく地道な努力の積み重ねが重要なのではと思う。

文 献

- Bandura A (1986) Social Foundations of Thought and Action : A Social Cognitive Theory. Englewood, NJ. Prentice Hall.
- Crick NR, Dodge KA (1994) A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin* 115; 74-101.
- Eisenberg N, Fabes RA, Losoya S (1997) Emotional responding : Regulation, social correlates and socialization. In : Salovey P, Sluyter DJ (Eds.) *Emotional Develop-*

- ment and Emotional Intelligence : Educational Implications. BasicBooks, New York, pp.129-163.
- Feshbach ND, Feshbach S (1969) The relationship between empathy and aggression in two age groups. *Developmental Psychology* 1; 102-107.
- Halberstadt AG, Denham SA, Dunsmore JC (2001) Affective social competence. *Social Development* 10; 79-119.
- Kendall PC (1993) Cognitive-behavioral therapies with youth : Guiding theory, current status and emerging developments. *Journal of Counseling and Clinical Psychology* 61-2; 235-245.
- Kendall P (2000) Guiding theory for therapy with children and adolescents. In : Kendall P (Ed.) : *Child and Adolescent Therapy : Cognitive-Behavioral Procedures*. Guilford, New York, pp.3-27.
- 河内なぎさ (2007) 入所児童に対する総合的アセスメントの検討—アセスメントとカンファレンスを通して. *心理治療と治療教育. 情緒障害児短期治療施設研究紀要* 18; 85-90.
- NPO 法人 日本こどものための委員会 (2006) キレない子どもを育てるセカンドステップ.
- NPO 法人 日本こどものための委員会 (2006) 暴力防止教育プログラム (コース4) セカンドステップ指導の手引き.
- NPO 法人 日本こどものための委員会 <http://www.cfc-j.org/>
- 社会福祉法人タラバ 情緒障害児短期治療施設バウムハウス (2007) 心理治療と治療教育. *情緒障害児短期治療施設研究紀要* 18; 171-175.